

山と博物館

第43巻 第6号 1998年6月25日

大町山岳博物館

特集 「日本山岳画協会展」 7/18~8/30



ニルギリ北峰（ネパール） 藤江幾太郎

日本山岳画協会展開催にあたって

日本山岳画協会

日本山岳画協会は好んで山を描く画家の集団として、それぞれの道に精進していた人々を横に連ねて、互いに親しみを増し、作画にも、発表にも便宜を加え、鑑賞や研鑽の機会を多くしようという目的で発足いたしました。

足立源一郎、中村清太郎、石井鶴三、茨木猪之吉等を創立会員として発足以来、本年で六十二年になりました。

題材は狭く山岳と絞らず、山麓も、山に生きる動植物、山にちなむ民話伝説、天象、人の生活まで広く題材を求めています。

当会は、東京において毎年定例展を、一九八四年以来ほぼ五年ごとに大町山岳博物館で特別展を開催しております。今年も同館のご厚意で特別展を開催する運びとなりました。

ご来館の皆様にご高覧いただけますことを、大変幸せに存じます。

大槍小槍

上田 太郎

槍ヶ岳山荘での山岳画教室は三年続きの台風に見舞われている。雨中登ってきたK君、M君共早々に下山。その日は終日雨の予報。だが何故か外れ。午前十時、空が明るくなり陽がこぼれる。彼らを帰すのじゃあなかったが、後の祭りである。晴れるかも。そんな期待が実現した。描けるネ。描けますネ。関戸氏と顔見合わせニンマリ。西鎌尾根を千丈乗越へ。振り返ると大槍小槍が、わずかなガスの中で薄陽を受けていた。九月末の紅葉し始めた四囲の沢々にガスが走る。その時突然、鳥の声を耳にした。関戸氏も聞いたという。もう「ケッコー」と。大槍小槍の絵はこうして生まれたのである。

冬姿槍ヶ岳を描く

江村 真一

十二月、冬の槍ヶ岳が描きたくなった。安房トンネル開通にともない、移転新築した中の湯が仮オープンしていると聞き、さっそく第一日をゆっくり湯につかることにする。新中の湯は、以前の谷間の湯場と違いすばらしいながめだった。夕日に照らされ輝く奥穂から前穂の稜線は、高く優雅にそびえていた。

翌日、夏の喧騒がうそのような上高地、河童橋を横目に横尾まで雪も少なく、天気も良く快適に進む。あまりの好条件に、明日からのことが、かえって心配になる。横尾の避難小屋をのそくと、静かに二人がストープにあたって、どうぞどうぞと招いてくれた。

しかし同行のM君が、「小屋はおもしろくない。テントにしよう」とのこと。整地してテントを張る。なんと横尾にテントは我がチームの一張りだけだった。

夜半から雪が降り出し、除雪の為、三時に起きるはめになる。五時頃起きて外の様子を見るが、降雪しきり、停滞と決めこみ、又寝込む。八時頃あまりの明るさに目が覚める。薄日がさし一部青空も見える。少々遅いが出発を決める。ルートは降雪のため、わずかに判明できる程度、膝から股ぐらいのラッセルが続く。途中からM君に先頭をゆずる。歩みは遅々たるも、森林限界へ二時半到着。稜線は、風に飛ばされて、雪はほとんど無い。槍や穂高が午後の斜光に照らされて、陰影に富み、最高の山の表情を見せてくれた。あまりゆっくりできず残念だったが、冬山の写生行としては、十分楽しむことができた。M君と乾杯！



冬姿槍ヶ岳 江村 真一

たそがれのマッターホルン

牧 潤一

これは昨年大町山岳博物館で発表した「ヴァリス山群三六〇度のパノラマ」制作のため何度もゴルナーグラートをたずね、そこから時間をかえ、角度をかえて何枚もスケッチしたマッターホルンの中の一枚である。

上部に「こよいの月夜明らけくこそ…」を思わせる豊旗雲がひろがっているので、画題を「豊旗雲のマッターホルン」としようかとも思っている。

その他パノラマより二時間位後の光を受けた「朝のリスカム」三〇号。昨秋取材のホテルエヴェレスト・ヴェーから見た、「朝のクーンブ山群」も出品予定。右端にアマダラム、左端にタウツエまで、横長の百号にうまく構図を納めようと、目下悪戦苦闘中である。



たそがれのマッターホルン 牧 潤一

一瞬の秋

後藤 三男



奥穂高岳 (涸沢カール) コンテ 後藤三男

私達の生活圏に秋の気配を感じはじめるとき、ここ本谷橋を渡って夏道をたどり、涸沢ヒュッテの見え

るあたりまで来ると既に三段紅葉、ホツとして吹き出す汗を拭いて休息。見頃の季節は平年で一〇月初旬。穂高連峰の山塊と涸沢カールの斜面を彩る真紅のナナカマド、黄色のダケカンパ、緑のハイマツのコントラストは

瞳目の風景である。目にするこの感動を声に出したりすれば吹き飛んで霞んでしまうような怖さを感じる。じつくりと見つめて心の奥底に秘めるような思いを込めて、コンテでスケッチブックに描き込み水彩で着彩、乾き待って退色した色調に意図半ばを感じながら湖沢の雄大な自然の造形から受けた感動を大切に、イメージをふくらませて描き込み、コンテ、水彩で補って完成。

数日この辺で描いているうちに目をみはるような光景も過ぎれば一瞬で、木枯らし、一番雪の訪れとともに沈黙の冬景色へと移って行く。

ツクチエの祭り (ニルギリ山)

熊谷 樞

おととしの秋、西ネパールのツクチエ村を訪れたときたまたまお祭りがあって、七千メートルのニルギリ山の白い峰をバックに練り広げられた、チベット仏教のドラマと踊りを描いたものだ。中央の白い面の僧は、この地の仏教復興の聖者で二人の夫人を従え、両サイドの大きな帽子をつけ鈴



星空のツクチエビール 熊谷 樞

穂高、ヒマラヤそして穂高

増田 欣子

穂高湖は私にとって大きなアトリエ。やがて海外の山へと足をのばしていった。

○氷雪のアマ・ダブラム(ネパール)

エベレスト街道の途中にあるシヤンポチエの丘、そこに日本の登山家宮原巍さんが建てたホテルエベレストビュイがある。ここから世界の最高峰エベレストを望むことが出来る。しかし、何と言っても美しいのは、右手前方に聳えるアマ・ダブラム(母の首飾り)(六八二二m)、その山容は人の心を引きつける。

○ガンゴトリ氷河からのバギラティ(インド)

聖なる河、ガンジスの源流の一つである、ガンゴトリ氷河の向こうに見える白い峰、垂直の壁は乳白色に輝く、三峰あるが近づくと一峰は見えなくなる。

○聖山カイラス(チベット)

チベット高原の西に、仏教、ヒンドゥー教、ボン教等の聖山カイラス(六六五六m)がある。この山を一周するコルラ、五二キロを信仰心の篤い人々は五体投地で回る。最高地点ドルマ峠は五千六百メートル。白いヘルメツト型の奇妙な山カイラスは遥か彼方からも目立ち、そのたたずまいには神秘性が感じられる。

ヒマラヤやチベットから帰ったら、私は穂高に憩う。異国の旅の疲れは、父なる穂高、そして母なる湖沢で癒すことが出来る。



ガンゴトリ氷河からバギラティ峰 増田 欣子

籠川谷の啓示

平沢 利夫

登山口あたりには山の神という地名や石の祠がある。山の神の領域と、人の住む里との境界とを示す結果だと言う。

五月の中旬頃だった。針ノ木岳日帰り写生に出掛けたが、大沢小屋を過ぎるあたりで雨となり、峠近くでは雪になった。針ノ木の避難小屋に逃げ込んでガスの切れ間を待ち、それでも船窪岳と七倉岳が描けた。

話し声も通らない吹雪に変わった中を山仲間と、ひたすら大雪渓を下る。土捨て場あたりでようやく風と雨から開放され、車で長野にむかった。鯉のほりや、水の張られた五月の田に、人の住む世界に帰れたのを実感し、つい先程までの天候急変の山上世界が異界としか思えなかった。

麓川谷でもう一つ、非日常的な感慨に巻き込まれた。大沢小屋で前泊し、翌日蓮華岳まで描きに行こうと夜の九時に川沿いの林道を歩きはじめたが、川原から小屋への小径がどうしても見つからない。九月の小雨の谷間は鼻をつままれても判らない程の真の間。二時間近く川原を上下した結果敗退したのだが、夜気には物ノ怪や魃魃魃がじっとこっちをうかがっているような気配が満ちていて、久しく忘れていた闇の怖さと凄さが迫ってきた。



花咲くウルタル山麓 岩切 岑泰

五月下旬、除雪も終わり冬期間閉鎖されていた交通止めの解除されるのをまつて、でかける。白銀の越後駒ヶ岳（二〇〇三m）と斑もようの残雪と山毛櫨の芽吹きのコントラストは見事である。北之岐川の石抱橋から上流の学習院大学のヒ

いま私の家の窓から北アルプスの一部が見える。一昨年仕事の第一線から退いたのを機に横浜から信州に移り住んだのである。月並みな表現ではあるが、山紫水明、四季折々の風光に魅せられて以前から何度もこの地に足を運んでいたのがあった。

こ縁があつて当協会の一員に加えて頂いて

若林 晴男

信州と私の山の絵

ユツテ付近は、まだ開発されず自然があり静寂そのものであり絶好のモチーフである。駒ヶ岳から檜廊下、中之岳更に鬼岳への縦走尾根、荒沢岳の岩稜はアルペンので圧巻である。

(98・5・5只見水系北之岐川石抱にて)



針ノ木岳 平沢 利夫

しかし、姿をみせてはくれなかった。悔しいから、又会いに行った訳である。投宿することにしたホテルのロビーに、長谷川恒夫の顔をアツてみたいと思つた。

上越線小出ー浦佐付近の車窓からみる越後三山（駒ヶ岳、中之岳、八海山）が水田に投影し、鯉のぼりが泳ぐ田植の頃が好きである。長かった冬も終わり残雪期の越後の山々が一番輝くときであり制作にかりたてられる。

山毛櫨の芽吹く頃

松原 修司

その朝は、まだ暗いうちに見晴らしのよい丘に登って日の出を待った。黎明の空にその秀麗な姿がピンクに輝き始めた時、未だ手元は暗かった。夢中でエンピツを動かして色をつけ一息ついた時、フンザの深い谷はすっかり明るくなっていった。岩棚に立つ宮殿が朝日を受けて白く輝き、谷全体を埋め尽くすアンズや桃の花々も、次々と美しく輝きはじめた。正にシャングリラの眺めであった。



八海山 六日町にて 松原 修司

花咲くウルタル山麓

岩切 岑泰

るような気がしている。

『不老長生の秘境』・シャングリラとして名高いカリマバードの村落を訪れるのは、三度目であった。この村の顔であるウルタルII峰（七三八八M）は、V字形に広がる巨大な岩稜の隙間に聳え立つ。初めての出会いは八七年ほんの一瞬であった。しかし、それだけに印象深いものがあり、忘れることが出来ない山の一つになった。二度目は、前年の九一年に天才登山家・長谷川恒夫がその山で遭難死したこともあり、再度見

プにしたボスターが貼ってあり、思いもかけない出会いに驚かされた。三度目の正直と言おうか、今回はじっくり対面することが出来た。



乗鞍晩秋 若林 晴男

オートルートはヨーロッパアルプスの代表的なスキーツアーコースで、長年の夢だったマッターホルンの北壁を描くために挑戦してみた。トリアン小屋で偶然にも旧友に出会い、ワインを痛飲したのがたまたま後半すっかりバテてしまった。ヴィニエット小屋を過ぎてからホワイトアウトのため、先が全く見えなくなり、運良くブクタンブクタンの無人小屋が見つかった時はすでに暗くなりかけ、まさにダウン寸前、九死に一生の思いだった。翌朝最後の難関と言われているヴァルペリーヌのコールに向かう。疲労困憊疲労困憊の末にコールに辿りつき、念願の北壁の威容を目の前にした町、感激あまり涙がとめどなくあふれ出たことを思い出

十余年、その間描いて回った信州と周辺の山岳風景。然し近年に至るまで高速道路や新幹線が未整備の為往復に手間取り、何時も限られた時間内での制作を余儀なくされ、毎々未完成の作品を抱えて帰る無念の繰り返しであった。
 本展の「乗鞍晩秋」はそうした思いを長いこと引きずっていた作品で、仕上がるまでに優に五年以上の歳月を要した。家内はその思い込みの割には見栄えがしないと手厳しいことを言うが、やっと自らに課した宿題の一つを成し遂げた様な気持ちである。
 「山村雪景（新行）」と「白馬岳春景」はどちらも拙宅のある美麻村内の取材だ。なんと言っても描く対象が身近にあるということの心強さを沁々感じたことであった。
 これからも未熟な筆に自然の移ろいを写して絵の道に精進して行こうと思っている。



マッターホルン北壁

武井 清

マッターホルン北壁 武井 清

す。苦しかっただけに忘れられない作品の一つである。

山登りはつらければつらいほど、苦しいれば苦しいほど、それを乗り越えて頂きに立った時、何ものにもかえがたい素晴らしい感動を与えてくれる。この感動を絵に伝えたいと思いはじめてすでに久しい。先はまだまだ遠い気がしてならない。何れにせよ地道な努力を続けていくしかないと思う。

刻（三俣蓮華岳丸山）

高橋 てる子

北アルプス三俣蓮華岳より、双六岳への稜線を気持ちよく歩いていると、槍ヶ岳を背に白く光っている地面があると、近づいてみるとハイマツの白骨化した枯れ木が、一面に不気味に散らばっていた。

ハイマツの墓場である。 どうしてここだけに、それも槍ヶ岳に見守られていることは、神様が北アルプス中のハイマツの枯れ木を集めた気がした。

青々と葉を茂らされて、地をはっていった時は、かわいらしい雷鳥のお宿にも楽しい日々があったでしょう。

それが、もがき苦しんできたように重なり合っているのです。

凄絶な自然のいとなみを見た気がした。私は人間のいとなみと同じものを見たように、心に深くえぐられる思いであった。

この感動を絵に表現することの難しさを感じながら描いた。



三俣蓮華丸山 高橋 てる子

梅池高原雪景

沢 松樹

梅池高原の五月、水芭蕉の咲く前はまだ一面の雪だ。訪れる人の少ない高原は静寂の中であつた。この広い高原にいるのは自分一人ほかにだれも居ない自然の中で制作出来るのはうれしいことである。

この雪の下で水芭蕉が春を待っている。やがてこの雪が解け、白く清楚な花卉を見せるようになると多くの人がつめかけてくる。

その前にこの静かで大きな高原を独り占めしているのはまさにリッチな気分だ。この日は風もなく、人もいなくて素敵な制作日和であつた。



松樹 沢 松樹 梅池高原雪景

んではかりはいてくれない。吹きだまりの雪にはまり、死に損なった冬の薪拾い。親戚のおじさんや、大好きだった近所のおじさんの命を冬の丹沢は奪ってしまった。
 そうした結びつきが、丹沢山を大きく、温かく、また厳しい自然の姿として、私の心を包んでいる。そこには、土や草木の香りを覚える心の安らぎの山として。また、私を一族のひとりとして掌に乗せてくれる頼もしい魔神のそのように。膝を折って筆を握る。

されど丹沢山

関戸 紹作

「山の絵」というと高い山を描きたいのは人情であろう。学生時代（戦時中）から高山に憧れて登ることになった。宿泊代の米を背負って。しかし、絵を見ると唯の形の書き写しの感だけが残っている。再度その山に登ると「やあ、また来ましたね。」と客として迎えているだけの感である。富士山にも何十年か通っている。しかしまだ私に土の匂いがしみこまず、私を客扱いの感である。
 生まれ故郷の裏丹沢。そこでは暮しの為に、一年中新しいに追われ、堆肥用の草刈りに連日山に通った。足元の藪におどかされ、蜂に追われながら。山里の生活は、この山の地力に支えられている。しかし、山は温かく包

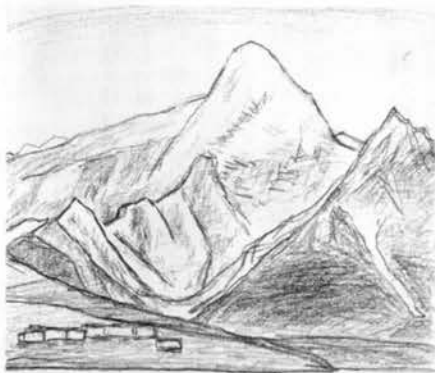


裏丹沢 関戸 紹作

ニルギリ北峰（ネパール）

藤江幾太郎

今回出品の主作品は、ネパール奥地、ジョムソムの風景である。その場所は、最近特に開けた所で、ジョムソムの飛行場の近くに、新しい宿が沢山建設された。その内の一軒の二階から、ニルギリ北峰がよく見えるのでこの宿に五泊して作品を描いた。
 この作品は、八〇号であるが毎日部屋からよく見えた。この宿の階段が急で、昇降が辛いのので居室で暮していた。二階の部屋は、ベットが二個中央にあり、窓側が写生の場所、隣にトイレ洗面所があった。食事は三食、階下から運んでくれた。
 毎日来るはずのポカラからの空路が休みになり困った。宿に頼んで、臨時に出る五人乗りヘリコプターを使って、ジョムソムを脱出した。外人三人と相乗り、当方二人だけ五人乗りのヘリでポカラへ脱出した。
 もちろんかなり高かついたがやむを得なかった。



ニルギリ北峰（ネパール） 藤江幾太郎

バックナンバーのお知らせ

日本山岳画協会、または会員の方々に関する「山と博物館」のバックナンバーがあります。巻号は次のとおりです。内容につきましては主なものの紹介ですが、どうぞご了承ください。
 第34巻第7号（平成元年7月）
 山旅素描 足立真一郎
 日本山岳画協会のあゆみ 藤江幾太郎
 第39巻第7号（平成6年7月）
 日本山岳画協会展開催にあたって

「山の描き方」 日本山岳画協会 関戸 紹作
 第39巻第12号（平成6年12月）
 牧潤一先生、江村真一先生より絵画寄贈のお知らせ

第42巻第7号（平成9年7月）
 大糸沿線スケッチポイント案内 牧 潤一
 バックナンバーの請求方法
 右記にご希望のものがありましたら、一部一〇〇円でおわけします。巻号と部数を明記の上、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛に送金ください。（送料当方負担）

お知らせ

「動物写生画展」と題し、五月に行われた写生画参加者の作品を山岳博物館講堂において展示します。期間は七月五日(日)から八月三〇日(日)までです。入場は無料です。

山と博物館 第43巻 第6号
 発行 一九九八年六月二十五日発行
 〒 長野県大町市大字大町八〇五六一
 大町山岳博物館
 TEL 〇二六 一 二二一 〇二二
 印刷 大糸タイムス印刷部
 定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
 郵便振替口座番号 〇五四 〇七 一三三 九三